



牧野富夫・村上英吾編著

『格差と貧困がわかる 20 講』

中澤 秀一

本書は、日本大学経済学部で現在も開講中である総合講座「格差社会」の講義内容をまとめたものである。この講師陣はというと、格差・貧困を専門とする研究者のみならず、現場の第一線で活躍するジャーナリスト、医師、福祉職員、市民活動家まで、まさに多士済々であり、本講座が人気講義であるというのも頷けるところである。このように多方面から、格差貧困について論じられているのが本書の特徴であるが、もう一点挙げておきたいのは、各講の分かりやすさである。1 講座あたりの分量が10数ページ内に収められているので、内容もコンパクトにまとめられており、それぞれの論点が非常に明瞭なのである。ともすれば専門書にありがちな「読みにくさ」がなく、幅広い読者層に受け入れられるであろう。

では、講師陣が講座を通じて、もっとも学生たちに伝えたかったのは何であったのだろうか。それはおそらく、格差や貧困が他人事ではなく、自らにも降りかかってくる、きわめて身近な問題であるということではなかろうか。平生、若い学生たちに接していて感じるのは、彼ら彼女

らが「格差」や「貧困」に鈍感なことである。もちろん、社会に歴然とした格差が存在し、日々貧困にあえいでいる人々がいることを頭では分かっている。ところが、それを自分自身の問題として捉えられているかという、なかなかそこまで考えが及んでいない。本書は、格差や貧困について、自己と社会のあいだにある大きな「溝」を埋め、それらが身近な問題であることを気づかせてくれるであろう。

さて、内容について若干触れておくと、本書は3部構成となっており、まず「第一部 格差社会のいま」では、ジェンダー、高齢者、都市と地方、社会福祉、税制、外国人労働者等の様々な視点から格差社会と貧困が解説されている。つづく「第二部 格差と貧困」では、日雇い派遣、偽装請負、多重債務、医療問題、障害者自立支援、母子家庭等の格差や貧困がまさに産みだされている現場からの報告に加え、格差貧困をめぐるアメリカ・EU・アジア等の世界の状況について言及されている。そして、「第三部 格差社会のこれから」では、今後の格差社会の展望について、「格差と貧困」の処方箋を中心に解説が加えられている。とくに、「第三部」で多くの講師陣が共通して強調するのは、労働組合をはじめとする運動の重要性である。一人ひとりが自らの問題として格差や貧困に取り組み、行動に移していかなければ、解決の道すじは見えてはこないだろう。

(明石書店・2008年7月・1800円)

(なかざわ しゅういち・静岡県立大学短期大学部講師)